

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K13539

研究課題名（和文）19世紀中葉の「アジアの銀吸収」に関する実証研究：貨幣流通と為替市場の統合的分析

研究課題名（英文）Empirical Study of 'Asia's Silver Absorption' in the Mid-Nineteenth Century:
Integrated Analysis of Currency and Exchange Market

研究代表者

小林 篤史（Kobayashi, Atsushi）

京都大学・東南アジア地域研究研究所・助教

研究者番号：40750435

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、19世紀中葉における「アジアの銀吸収」の実態を解明することであった。第一に、銀吸収の実態を数量的に把握すべく、アジア各地の1820年代～70年の銀貿易の規模とトレンドを統計から復元した。その結果、アジアの西欧からの銀輸入額は、1840年代は平均2万ポンドだったものが、1850年代には7百万ポンド、1860年代前半には9百万ポンドへと増大したことが判明した。さらに、アジアの銀貿易のメカニズムを解明すべく、西欧・アジア各地の銀市場価格と為替レートを用いたブリオン現送点による分析の結果、1850年代～60年代にかけてアジアに銀を輸入する裁定取引の利益が生じたことが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、国際通貨システムの通説に修正を迫る新たな議論を提示したことにある。従来は19世紀末に成立した国際金本位制が国際通貨体制の原型だと認識されてきた。それに対して、近年の金本位制以前の西洋複本位制に注目する研究と共に、本研究は19世紀中葉に西洋だけでなくアジアも核となりながら、多様な貨幣システムの併存により機能した国際通貨システムの存在に光を当てた。この研究により、現代にいたる国際通貨体制の発展史は、経済グローバル化が始まった19世紀初頭に遡るとともに、各地域固有の貨幣システムに着目した視点から再構築される必要性が提唱されたといえる。

研究成果の概要（英文）：This study purposes to empirically analyse Asia's silver absorption during the mid-nineteenth century. To quantify the scale and trend of Asia's silver absorption, the study reconstructed silver trade in Asian countries between the 1820s and 1870 using their original trade statistics. Consequently, it found that the value of silver imports from Europe into Asia dramatically increased from average 20,000 pounds in the 1840s to 7 million pounds in the 1850s and to 9 million pounds in the early 1860s. Additionally, to shed light on the mechanism of silver trade in Asia, through application of bullion-points method to a new dataset of silver prices and exchange rates in multiple Asian and European cities, this study revealed that the arbitrage profit by importing silver arose over the 1850s-1860s.

研究分野：経済史

キーワード：アジア銀吸収 銀貿易 為替市場

1. 研究開始当初の背景

近年、国際通貨体制の通説に修正を迫る新たなグローバル経済史研究が現れている。従来、近代世界経済の成長を支えた国際通貨体制の原型は、19世紀末以降に台頭した国際金本位制だと認識されてきた。一方で、近年の西洋経済史では、19世紀中葉にフランスを軸とした国際複本位制が、為替の安定や国際収支の調整に機能していたことが実証されてきた。特に、1849年以降のゴールドラッシュによる金増産という攪乱要因に対して、西洋諸国が金を吸収したことで、金銀比価と為替の安定が維持されたことが示された。また、金吸収と引き換えに西洋の貨幣流通から排出された大量の銀がアジアに吸収されたことで、西洋とアジア間の貿易成長が進んだことも指摘された。この議論は、金本位制が台頭する以前に、複本位制を軸とした国際通貨システムが世界貿易の成長を支えており、そこでは西洋のみならずアジアも主体的な役割を果たした可能性を示している。

19世紀中葉のアジア経済史についても研究が進んでいる。1820年代以降の中国からインドへの銀流出については、イギリス主導のアヘン貿易を原因とする従来の議論を超えて、スペインドル通貨体制の崩壊に絡めて、その要因に迫る議論が活性化しており、当時のアジアの貨幣流通が、グローバルな通貨システムと連動していた可能性が示された(豊岡・大橋編 2019『銀の流通と中国・東南アジア』)。また、同時期のアジアの金融については、英東インド会社による為替手形を用いたインド・イギリス間の送金システムの概要や、民間為替銀行のアジアにおける発展を分析した研究成果が出されており(西村、鈴木、赤川編 2014『国際銀行とアジア 1870~1913』)。アジアの貿易成長を支えた国際的な金融システムの実態は、以前よりもかなり明らかになってきたと言える。ただしこれらの研究は、1850年代以降の「アジアの銀吸収」を、「銀流通圏」のアジアにとっては自然な現象であると見なしており、それに特別な注意を払っているわけではない。

2. 研究の目的

以上のように、西洋経済史においては19世紀中葉の複本位制に着目した新たな研究が活性化し、そこでは「アジアの銀吸収」の重要性が指摘され、一方のアジア経済史においても19世紀前半から中葉のアジアの貨幣流通や金融市場の様相が明らかになりつつある。しかし、「アジアの銀吸収」のメカニズムやその担い手については本格的に検証されていない。そのため、その時期の国際通貨システムの機能とそこでのアジアの役割は未だ不明なままであり、上記で説明した研究潮流の進展にとって足かせとなっている。そこで本研究は、「アジアの銀吸収」はいかにして実現し、それは金本位制以前の国際通貨システムにおいてどのような役割を果たしたのか?という問いに答えることで、新たな研究潮流を進展させることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究の目的である、19世紀中葉の「アジアの銀吸収」の実態解明に向けて、具体的に三点の課題を設定した。第一に、どれほどの銀がアジアのどこに流入したのかという「規模と構造」の問題を解明するため、1820年代から1870年にかけてのイギリス、そしてインド、東南アジア、中国といった主要アジア地域の貿易統計を収集整理し、銀貿易を数量的に復元した。第二に、いかにして銀が流入したのかという「メカニズム」の問題を解明するため、当該期のアジア諸都市で記録された高密度の金融データを収集・データセット化し、それをを用いたプリオン現送点の分析を実施した。プリオン現送点の分析は、国際収支を支えた外国為替手形の市場も対象に含めるため、為替レートのデータについても収集・データセット化を進めた。この分析により、国際収支の調整に用いられた送金手段として、為替手形と銀のどちらが用いられたのかを解明した。第三に、誰が銀を運んだのかという「担い手」の問題に迫るため、当時アジアで発展し始めた為替銀行に注目し、その金融取引がアジアへの銀流入にいかに関与したのかを、経営資料から分析した。最後に3つの実証分析の成果をまとめることで、「アジアの銀吸収」の実態を解明し、19世紀中葉の国際通貨システムにおけるアジア経済の役割を考察した。

4. 研究成果

「アジアの銀吸収の規模と構造」：銀吸収前後の時期も含めた1830~70年代のインド、東南アジア、中国における国際的な貨幣流通(銀も含めたプリオン貿易)の実態を数量的に解明した。まずはイギリス、インド、中国、東南アジア諸地域の貿易統計を、イギリス・ブリティッシュライブラリー、イギリス国立文書館、シンガポール国立図書館、または近年整備が進んでいるデジタルアーカイブ等から収集した。それら貿易統計から各地域との銀の輸出入データを抽出・整理し、それを数量単位、年次、そして貿易相手地域の一貫性を調整しながら統合的に用いることで、銀貿易の規模と構造を推計した。その結果、アジアの西欧からの銀輸入額は、1840年代は平均2万ポンドだったものが、1850年代には7百万ポンド、1860年代前半には9百万ポンドへと、増大したことが判明した(下図参照)。とりわけ、イギリスからインドと中国への銀流入額が大きかったという地域別の実態も明らかとなった。

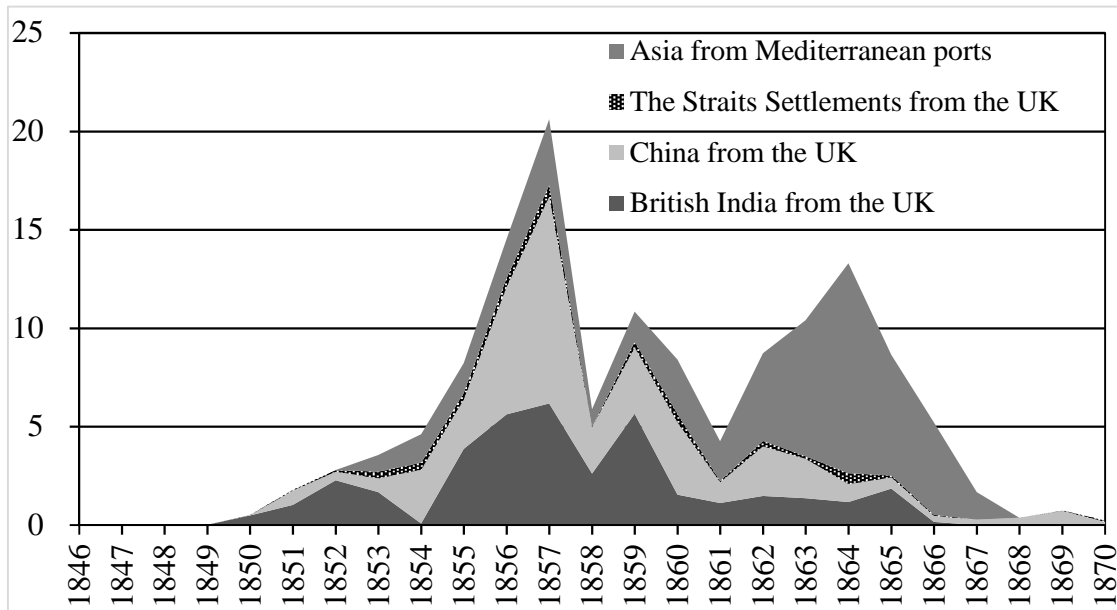


図 西欧からアジア各地への銀流入額、1846年～1870年（百万英ポンド）出所：Kobayashi, Atsushi, 2022, 'Asia's Silver Absorption through the Triangular Settlement System, 1846-1870', *The Journal of Economic History*, Vol. 82 (2), pp. 442-479, Figure 1.

「アジアの銀吸収メカニズム」：アジアに銀が流入した市場要因を現送点の分析によって解明した。大量の銀が西洋からアジアに運ばれた要因には裁定取引の利益があったという仮説を検証するため、地域間のプリオンの裁定取引の利益を捉え得る現送点の分析を実施した。その際に、まずは1830年代以降の多国間での決済構造を把握する必要があったことから、イギリス議会文書やアジア各地で出版された商業誌の情報を包括的に収集整理し、商品流通とその決済の流れを再構成した。その分析の結果、1830年代以降、イギリスの中国に対する貿易赤字が、インドの中国に対する貿易黒字により相殺され、さらにそこで振り出された大量のイギリス・ロンドン宛為替手形が、インドのイギリスに対する負債の支払いに用いられたことが判明した。すなわち、本研究の対象時期となる19世紀中葉には、イギリス、インド、中国の間では為替市場とプリオン市場の連携によって、二国間だけでなく、三国間で多角的に国際決済が行われていたことが明らかになった。さらに、その三国間決済システムの中でどのように銀貿易の裁定利益が生じていたのかを、アジア各都市の金融データを用いた現送点分析により検証した結果、為替レートが銀の取引コストを超えるほど高値になり、為替手形による送金の機会費用が高まりすぎた場合、銀による送金が選択されるというメカニズムの妥当性が検出された。そして実際に1845年から1870年にかけて月次レベルで復元された現送点と為替レートの関係の時系列変化を分析すると、1850年代初頭から1860年代半ばにかけて、イギリスからインドと中国に銀を輸出することによる裁定取引の利益が大幅に高まったことが判明した。その時期には実際にアジア各地のイギリスからの銀輸入額が増大しており、現送点のメカニズムとそこで起こった変化は、実際の銀流通の規模と動向を説明するメカニズムおよび要因を生み出していたことが分かった。一方で、分析の途上では、アジアに流通した銀は単一種類ではなく、中国産の馬蹄銀（銀塊）、ラテンアメリカ産ドル銀貨、インドルピー銀貨、そしてイギリス標準銀棒といった多様な銀が国際的に取引されていたことも看守された。これら多様な銀の流通状況を正確に反映させた分析についても、今後は実施していくことで、アジアの銀吸収の実態がより深く、かつ正確に捉えられると期待できる。この発展的な分析課題については、今後の研究に継承する必要がある。

「アジアの銀吸収の担い手」：1850～60年代のアジアの銀吸収の時期に、実際にアジアに銀を運び取引したアクターの活動を同定するため、イギリス系東洋為替銀行の金融取引の内実を経営資料から分析した。為替銀行は1850年代以降、イギリス東インド会社によるアジアの金融市場の独占を切り崩していき、ロンドンを拠点にアジア各都市に支店網を広げていくことで、西洋とアジア間、またアジア域内の送金業と貿易金融をこれまでになく規模で展開した。本研究では、アジアへの銀流入を担ったのはそれら為替銀行であったという仮説を立て、それについて経営文書を用いた分析により検証した。主な東洋為替銀行として、1853年にロンドンを本部として設立されたチャータード銀行（Chartered Bank of India, Australia, and China）また同年にインド・ボンベイを拠点として設立されたマーカントイル銀行（Mercantile Bank of India, London, and China）の現存する経営資料を、ロンドンの香港上海銀行アーカイブ（HSBC Archives）とロンドン都市資料館（London Metropolitan Archives）において収集した。それら経営文書の内、本店と各支店の営業バランスシートに注目し、ロンドン本店とアジア各支店の取引実態や、本店・支店間の行内取引を分析した結果、それら銀行の主要ビジネスは、西欧とアジア間、そしてアジア各支店間で振り出された為替手形の売買であったことが分かった。つまり、東洋為替銀

行は、先に述べたイギリス・アジア間の多角的決済システムを為替手形取引および貿易金融によって作動させる、主アクターであったことが示唆された。また、銀流通の面では、それら為替銀行はロンドンからアジア各地の支店に企業内取引で銀を送金し、支店では為替手形の売買を介して市場に銀を供給していたことが分かった。部分的な資料ではあるが、為替銀行による銀売買の裁定取引バランスシートも発見され、ロンドンからアジアの支店にコストをかけて送付した銀が、アジア市場において売られた額、またその売り上げを元手に振り出したロンドン宛為替の額といった情報が抽出できた。つまり、東洋為替銀行はアジアで生じた銀貿易の裁定取引の利益に敏感に反応し、その本店支店ネットワークを駆使して銀の流通取引から利益を上げていたという証拠が提示されたといえる。一方で、それら銀行の銀取引がアジアの銀吸収のどれほどを占めたのかは、史料上の制約から本研究では解明に至らなかった。今後の課題として取り組む必要が残されたといえる。

以上の3点の実証研究の成果をまとめた論文「Asia's Silver Absorption through the Triangular Settlement System, 1846-1870」として国際誌 *The Journal of Economic History* に投稿し、厳密な査読と応答修正の結果、2022年度に出版に至った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Atsushi Kobayashi	4. 巻 82
2. 論文標題 Asia's silver absorption through the triangular settlement system, 1846-1870	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 The Journal of Economic History	6. 最初と最後の頁 1-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1017/S0022050722000092	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Atsushi Kobayashi	4. 巻 37
2. 論文標題 Market integration via entrepot: Southeast Asia's rice trade, 1828-70 (掲載確定)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Economic History of Developing Regions	6. 最初と最後の頁 1-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計5件

1. 著者名 社会経済史学会、馬場 哲（小林篤史 第2章14項アジア間交易）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 746
3. 書名 社会経済史学事典	

1. 著者名 吉澤 誠一郎 監修（小林篤史 4-17項 19世紀の労働・商業移民；4-18項アジア域内貿易）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 378
3. 書名 論点・東洋史学	

1. 著者名 川中 豪、川村 晃一 (第3章分担 三重野文晴・小林篤史)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 376
3. 書名 教養の東南アジア現代史 (第3章 経済発展)	

1. 著者名 籠谷直人、島田竜人 (第10章分担 小林篤史)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 313
3. 書名 近代東南アジア社会経済の国際的契機 (第10章19世紀中葉のジャワにおける銀流出とシンガポール)	

1. 著者名 馬場哲・城山智子・神田さやこ他 (第2章14項分担 小林篤史)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 736
3. 書名 社会経済史学事典 (第2章14項 アジア間交易)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------

英国	The University of Cambridge	London School of Economics	Kings College London	
----	-----------------------------	----------------------------	----------------------	--